

第4節 絵画・写真を用いた表現指導の展開

— 見ることから書くことへ

1 国語教育とメディア・リテラシー

近代教育制度が出発してから今日まで、学校教育は次々と新たに出現するメディアとの関わりの中で展開してきた。映画やラジオは教室における授業の補助的な扱いであったが、テレビやビデオが普及すると授業への直接的な影響も出てきた。スライドに代わって、ビデオが視聴覚教材の主流を占めるようになる。そして1980年代以降は、コンピュータの普及によって新たな段階に至る。いま子どもたちはインターネットから多くの情報を得て、携帯電話のメール機能によって自在に他者とのコミュニケーションを実現している。このような高度情報化社会の到来とともに、メディア・リテラシーを国語教育で取り上げる傾向が加速している。

子どもたちをめぐるメディアの環境が多様化するに及んで、国語教育は文字メディアばかりではなく、映像を中心とした多様なメディアに目を向けなければならなくなった。「メディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力」¹としてのメディア・リテラシーに関する教材開発が、重要な課題として浮上したことになる。

第1章第2節でも言及したが、中学校の教科書を発行する5社の新しい教科書を分析した中村純子は、学習の展開のパターンを次の3種類に分類した²。なおここで言う「映像」には、絵や写真などの静止画像も含むものとする。

- ① 映像情報の読み解き方を学ぶ。
- ② 映像情報から理解を深める。
- ③ 映像情報から表現活動を促す。

第一のパターンに関わる教材は、写真やテレビの映像の受け止め方を論じた説明文教材が中心となる。第二のパターンでは、説明文の理解を深めるための工夫として写真が用いられる。そして第三のパターンの教材には、映像情報の解釈をことばで表現するという課題が課せられる。写真を見て題名を付け、その題名を伝え合うことが課題として求められるという形態である。このように、映像が表現指導の教材として教科書に確かな位置を占めるようになったことの意味は大きい。

メディア・リテラシーの授業という、直ちに連想するのは第一のパターンに属するものであろう。例えば複数の新聞報道やテレビのニュース番組を比較して、メディアが事実をどのように報道しているのかということを考える授業は、まさに情報のクリティカルなとらえ方を学ぶという重要なテーマである。ただし本節ではメディア・リテラシーの入り口とも言えるメディアとの関わりという点に主眼を置いて、特に表現指導に焦点を絞って論じてみたい。すなわちメディア・リテラシーの育成に配慮した国語科の授業を考えるための出発点として、映像の中でも特に静止画像である絵と写真を用いた表現指導の進め方について、具体的な実践に即して論述することにする。いずれも中村の分類で第三のパターンに分類された、絵・写真からことばを引き出すという活動を主に展開する授業である。

なお以下に提案する授業はすべてわたくし自身が実践したもので、中学校・高等学校のどの学年においても扱うことが可能な内容になっている。

2 絵からことばへ

表現指導の基本的な課題の一つは、「何を、どのように表現すればよいのか」という学習者の問いにどう対応するかという点にある。そこで教師は、表現課題について様々な工夫を凝らすことになる。絵画や写真を提示して表現のきっかけを与えるという実践は、これまでもよく行われてきた。そこでまず初めに、絵画を見て想起したイメージを詩の形式によって表現するという実践から紹介することにしたい。

参考とした文献は、谷川俊太郎の『クレーの絵本』（講談社、1995. 10）、および『クレーの天使』（講談社、2000. 10）である。どちらの本もパウル・クレーの絵画と、それに寄せた谷川俊太郎の詩が掲載された絵本になっている。特に後者の本には、紙に鉛筆で書かれた様々な天使のデッサンが掲載されていることから、コピーをプリントして教室で紹介することができる。「泣いている天使」と題する作品には、次のような詩が寄せられている。

まにあうまだまにあう／とおもっているうちに／まにあわなくなった
ちいさなといにこたえられなかったから／おおきなといにもこたえられなかった
もうだれにもてがみをかかず／だれにもといかけず
てんしはわたしのためにないている／そうおもうことだけが／なぐさめだった
(以下略)

授業はまずクレーの絵と、谷川俊太郎の詩を紹介してそれぞれを鑑賞させるところから出発する。絵のスライドや書画カメラのような装置があれば『クレーの絵本』の絵と詩の紹介ができるが、提示がしやすいことおよび「天使」というモチーフでまとまっているということから、『クレーの天使』の方が扱いやすい。授業は2編から3編程度の作品を読んで、感想を自由に話し合うという活動へと展開する。それから、谷川の詩を参考にして、クレーの描いた天使の絵に詩を寄せるといった課題に移る。谷川の詩を読むことによって、一つの「方法」を学んだ学習者は、様々なことばを駆使しながら、抽象的なクレーのデッサンに思い思いのことばを当てはめることができる。教師の工夫によってマップ法を導入するなどして、学習者が詩を創作しやすい状況を整えることも重要である。個々の学習者の作品は、教室で発表させたり、主なものをプリントして詩集を作ったりして、クラス全体に紹介するようにしたい。

この方法を他の絵画に応用して、絵から詩や文章を書かせるという授業が展開できる。表現のための一つのきっかけとして、絵画を用いるのは有効な授業の工夫であり、映像からことばを引き出すという活動はメディア・リテラシーにつながる要素にもなる。

クレーのような画家の芸術性の高い絵のみが教材となるわけではない。もっと身近なイラストを、表現の教材として用いることもできる。そこで次に、いつもここからの『悲しいとき』（扶桑社、2001. 8）および『悲しいとき・2』（講談社、2003. 3）を

教材化する試みを紹介したい。いつもここからは男性二人のユニットで構成される主としてコメディを担当するタレントである。かつてあるミルクコーヒーのCMで話題になったが、そのCMから生まれたものがこの『悲しいとき』という本である。本は一ページに一つずつ、「悲しいとき」に相当するシーンがイラストと短いことばによって表現されている。次にいくつかのシーンを引用する。

彼女のウォークマンが変なメーカーのやつだったとき
友だちの家で「テレビの音を大きくして」って言えなかったとき
頭が悪いのにノートだけはしっかりとっている人を見たとき
レンタルビデオのアダルトコーナーを子どもが走りまわっていたとき

まずはこの「悲しいとき」に注目する。授業は、本の中からいくつかのシーンを選んでイラストとことばを紹介するところから出発する。そこに描かれた「悲しいとき」について、何故「悲しい」のかという理由を考えつつ、そのシーンに関して感じたことや考えたことなども自由に表現させる。このような作業を通して、「悲しみ」という心情が多様な広がりをも有するものであることを学ぶ。ときに「悲しみ」がユーモラスな心情へと転換することもある。『悲しいとき』・『悲しいとき・2』には、表現指導に関わる教材として多様な切り口がある。

すべての「悲しいとき」にイラストが付いていることに注目し、イラストを見てそこからことばを想像するという活動を展開することもできる。たとえばP 137の《図3-4-1》のようなシーンは、イラストから様々なことばを引き出すことができる。ちなみに『悲しいとき・2』では、次のようなナレーションが書かれている。学習者の想像したことばとの比較を試みることで、ことばの広がりや奥行きを学ぶことができる。

- a 一番前で電車を待っていたら届かなかったとき
- b もう服装なんかどうでもよくなってしまったお父さんを見たとき

授業は最後に、学習者自身の「悲しいとき」をことばとイラストで表現させるところまで展開する。彼らは身近な場所に目を向けて、様々なシーンを創造する。ここに表現指導の一つの方向性を見ることができよう。

絵からことばを引き出すという趣旨の実践は多く出されている。まず絵を見て想像力を働かせ、それをことばの表現によって定着させ意識化する。このような指導過程は、絵本を用いた学習指導にも見られるところである。例えば言語情報が少ない絵本を見て、絵にことばを当てはめながら自由に物語を想像しそれをことばで表現するという試みもある。シルヴァスタインの『ぼくを探しに』（講談社、1979. 4）や、菊田まり子の『いつでも会える』（学習研究社、1998. 12）などからも、ことばを引き出す活動を主とした多様な授業を構想することができる。中学校の教科書にレオ・バスカーリアの『葉っぱのフレディ』（童話屋、1998. 10）が教材化されたことは周知の通りである。

3 タロット占いをを用いて

絵を教材として活用する実践をもう一例紹介する。それはいま若い世代を中心に静かなブームが続く「占い」を題材としたものである。特に「タロット占い」を取り上げて、文章を書くための方策として提案したい³。なおこの授業は西岡文彦による『編集の学校』⁴に紹介されたものをヒントにして考案したものである。またタロット占いの方法に関しては、『秘密のタロット・カード』⁵を参考文献として使用した。

タロット占いで使用するタロット・カードは、「大アルカナ」と称される22枚と、「小アルカナ」56枚の合計78枚のカードから成っている。すべてのカードを用いて占う方法の他に、大アルカナのみによる方法もある。今回作文の授業に導入するタロット占いは、大アルカナ22枚のみを用いた「スリー・カード・スプレッド」と称されるものである。

タロット占いでは、まずどんなことについて占うのかをあらかじめ決めておく。占う内容を念じつつ、カードをシャッフルおよびカットしたうえで、占いのルールに従ってカードを並べる。これを「スプレッド」と称する。スプレッドしたカードを開いて、その意味を読むのが「リーディング」である。このリーディングの結果から、相談者の相談内容に応じてストーリーを作ることになるわけだが、そこに国語教育との接点がある。すなわち、あらかじめ決められた相談内容のコンテキストに即して、回答のメッセージを一つのストーリーとして創作するという過程において、回答の内容を書くという活動がまさしく文章を書くという活動に直結する。

今回作文の授業に導入する「スリー・カード・スプレッド」は、大アルカナ22枚の中から3枚を選んで、1枚目と2枚目を間隔を空けて並べ、その中間の上部に3枚目のカードを表を開いて並べるものである。まずは最初の2枚のカードで質問に対する現状を読み取る。あくまでも2枚合わせて判断することになる。最後のカードではその現状に対して、未来はどうなるのかを判断する。

例えば最初の2枚で、「定期試験に備えて勉強に励んでいる現状」を見て、3枚目で「定期試験の結果」を見る。さらに恋愛に関して占う場合では、最初に相手の気持ちや現在の仲を占い、最後に将来のその恋愛の行方を占うことができる。

授業では、まず相談内容として学習者にとって身近な具体例を提示する。例えば彼らが共通して関心を持つ恋愛や進学の話などがふさわしい。相談内容に基づいてスリー・カード・スプレッドで占ったところ、1枚目に「恋人（逆位置）」、2枚目に「悪魔」そして3枚目には「月」のカードが出たとする。参考として学習者全員に22枚の各カードの意味を、「正位置」と「逆位置」とに分けてプリントに簡単にまとめて、あらかじめ配布しておく。ちなみに今回占ったカードの意味は、次のようになる。なお「逆位置」とは、カードが逆向きに置かれたときの意味である。この例における各カードの意味するところは、次のようなものである。

恋人（逆）＝恋人とうまくいかない。恋人とあまり会えない。相手がほかへ心移す。

悪魔＝よくない行為。人をだます。悪い誘惑。人を恨む。

月＝女性の生理。想像力が増す。同情心。母性愛。忍耐強さ。

相談者の相談内容のコンテキストに応じて、このようなカードの意味を当てはめて、回答のストーリーを創作する。なお、相談者と回答者の性別は原則として同じものとして回答することにする。回答はすべて文章にまとめるわけだが、多くの学習者が興味を持って

取り組むことが期待できる。彼らが意欲的に「書くこと」へと向かう取り組みこそが、作文教育の基盤を支えるはずである。

4 写真の教材化

絵とともに写真を用いた表現指導も様々な形で実践されている。古くは、大河原忠蔵が状況認識のための有効な方法として用いたことがよく知られている。大河原の実践では、スライドが重要な役割を担っていたが、その後新しい映像機器が次々と開発されて、授業で映像を活用する実践がよく行われるようになった。情報機器の普及によって、映像が学習者に身近な多くの場面で用いられている。特に写真の用途に関しては、レンズ付きフィルム、デジタルカメラ、ポラロイドカメラなどが若い世代を中心に愛好されることによって、著しく拡大された感もある。

大河原は土門拳の写真集に触発されて、一定の主題を持ったスライドを作成した。具体的な授業展開については、『状況認識の文学教育』（有精堂、1982. 7）の中で、次のような紹介がある。

このスライドを学習者に見せる。そのあと、学習者自身に、スライドと同一の主題、もしくは、その応用としての他の主題にとりくませ、その認識を、作文に書かせる。

このような実践が成立する背景として、的確な教材の選定という要素がある。どのような写真を用いてもよいというわけにはいかない。まさに「状況認識」につながるような、インパクトのある写真を発掘しなければならない。時には大河原のように自らカメラを携えて、教材発掘のためのフィールドワークに出る必要も生ずる。

教材として適切な写真を発掘することができたら、それを学習者に紹介しながら、ことばの活動を組み込んでゆく。一枚の写真から連想される様々なドラマを、文章にまとめるという表現の活動ができる。もちろん単に写真の感想を話し合うということでもよい。話すこと、書くことのいずれの領域にも応用できる表現活動を工夫することができる。

B・T・グリーヴの『ブルーデイブック』（竹書房、2000. 12）、および『ディアマム』（竹書房、2001. 7）が話題になった。これらの本の内容は、様々な動物の写真にことばが添えられたというものである。動物の表情とそこに寄せられたことばとの関連が興味深い。例えば、大きく開けた鳥の嘴の中に手を入れる小熊の写真には、「その気になれば、世界は素晴らしい発見に満ちている」、上を向いたカバの写真には、「ありのままの自分に自信を持つこと」ということばが添えられている。絵とことばによって構成されるところが、『悲しいとき』とほぼ同じ構成になっている。これにならって、その他の写真にふさわしいことばを考えて、その写真のメッセージをことばで表現するという活動を組織することができるだろう。写真からことばを引き出して表現へと展開するという活動のために、多くの写真の教材化が可能である。

松本人志の『松風'95』（朝日新聞社、1996. 6）も教材化が可能である。この本は、コメディアンとして活躍する松本の武道館ライブをもとに作成された。本にCDが付いていて、写真から即興的に短くてユーモラスな、かつアイロニーとウィットに富んだことばを引き出す試みとして、表現指導に活用することができる。例えば土門拳の「新橋」と題する写真には、敗れた衣服を纏った男性が呆然と虚空を見詰める光景が写し出されて

いる。松本人志はこの写真に対して、「ちゃんと応援したのに……」ということばを当てはめた。単に笑いを取るための皮相的な捉え方と言えばそれまでだが、写真の男性の置かれた状況を想像したうえで、その男性に感情移入をして語った短いことばになっている。「悲しみ」を一瞬にして「ユーモア」へと転換するセンスには、きわめて優れたものがある。このような表現を参考にしつつ、写真にタイトルを付けるという活動、さらに写真を短いことばで表現してそれを語るという活動を工夫することができる。

今村昌昭の写真に谷川俊太郎が詩を付けた本もある。『こっぷ』(福音館書店、1976. 4)と題する児童向けの本には、4枚のコップを被写体とする写真が紹介されており、その一枚一枚に谷川の短い詩が添えられている。コップに水が入っている写真の詩は、「コップに みずが はいっている」ではなく、「こっぷは みずを つかまえる」であった。同様にして、こっぷは「けむり」や「はえ」を「つかまえる」ことができる。そして4枚目の写真には汚れた手で持ったことから、指の痕跡がガラスの部分に付着してしまった。これを単なる指の汚れとして把握せず、「こっぷは はんにも つかまえる」という詩で表現したところに詩人の感性を読み取ることができる。同じ写真から、「こっぷ」を主語とした様々な表現を工夫するという活動を引き出すことができる。

5 絵画・写真を用いた授業の実際

続いて、大塚英志の『物語の体操』(朝日新聞社、2000. 12)からヒントを得た作文の授業内容について言及する。同書の第六講「つげ義春をノベライズして、日本の近代文学史を迫体験する」には、つげ義春の「退屈な部屋」という漫画のノベライズが取り上げられている。すなわち、つげ義春のストーリー漫画を読んで、その作品世界を小説の形式によって表現するという活動が紹介されている。これを参考に学習者に漫画のノベライズを試みさせることが、作文指導に繋がる。

大塚はノベライズ的具体例として、主人公を一人称で書いたものと、三人称で書いたものを紹介している。両者の具体例を比較してみると、それぞれの特徴が明らかになって興味深い。授業では、多くの学習者が共通して理解を示すような漫画作品を選定したい。さらにノベライズ的具体例を掲げておくように配慮する。具体例は、担当者の側でいくつか創作しておく。

ノベライズの対象とする漫画は、ストーリー漫画でもよいが、長さの関係からある程度場面を限定した方がよい。もちろん四コマ漫画を用いることもできる。漫画はプリントして配布し、それを学習者にノベライズさせる。完成した作品は、グループで相互に発表させ、評価を実施するとよい。特徴的な作品をまとめてプリントして、クラス全員で鑑賞するのもよい。

これまでに紹介した実践は、一枚の絵や写真をもとにして、ことばの表現を引き出すものである。そこで次に、複数の絵や写真を用いた表現指導の実践に言及しておきたい。発達心理学者内田伸子の『想像力の発達—創造的想像のメカニズム』(サイエンス社、1990. 12)には、ジャンニ・ロダーリによって提案されている遊びの一つが紹介されている。それは幼児に絵の描かれた5枚のカードを示して、「おはなし」を作らせるというもので、筆者は想像世界がどのようにして生成されるのかについて考察している。この五枚の

絵をもとにした物語の創作を、国語科の表現指導に導入することができる。

P138の《図3-4-2》に示すように、5枚のカードにはそれぞれ「オオカミ」「少女」「おばあさん」「森」「花」の絵が描かれている。内田の実験はこれを見ながら物語を創作するというものである。実際に取り組ませると、学習者は実に多様なストーリーを創作する。童話の「赤ずきんちゃん」のストーリーに類似したものが多く創作される。ある程度ストーリーの紹介を終えた時点で、今度はさらにP138の《図3-4-3》に引用した「ヘリコプター」と言う異質な絵のカードを1枚加えて、新たに創作させることにする。この点もまた内田の実験と同様である。どのような文脈を再構成するのかという点が工夫のポイントになる。

内田の実験を参考にして、次のような表現指導を構想することができる。まず身近な場所から何らかの関連性を見出しやすい内容の5枚の絵（イラスト）もしくは写真を選ぶ。次にそれとはまったく異質の内容の1枚を選んでおく。それぞれの絵は印刷して、学習者に配布する。最初の5枚の絵は、プリント1枚にまとめて印刷し、それを自由に構成してストーリーを創作させる。もしくは1枚ずつ切り離して、トランプのカードのようにシャッフルして一枚ずつ並べて順序を決めてから、その順序に従ってストーリーを創作するように指導する。そしてある程度ストーリーが完成してから、6枚目の絵のカードを示して、そのカードをどこに挿入したら完成したストーリーが破綻なく展開するのかを考えさせる。

もう一つ複数の絵・写真の教材化の実例を示す、西岡文彦による『編集の学校』⁶の冒頭に紹介されたワークショップは、「フォト・ストーリーを作る」というものであった。このワークショップでは、16枚の写真を含む図版の中から3枚を選択して、「疑惑」「ふるさと」というタイトルから想定されるストーリーを自由に創作する。たとえばある学生は、「疑惑」というテーマに対して3枚の写真を選択して、「宴会に明け暮れる某政治家」、「陰で巨大な金が動いている」、「事件が発覚し、某政治家は空港から高跳びする」というストーリーを創作した。同じ「疑惑」についてある社会人は、「謎の人物」「失踪した美女」「煙草（捜査とマスコミの追及に対して、シラを切り通す）」のようなストーリーを創作した。その他西岡が紹介したいくつかの「解答例」を参照すると、同じ図版でも全体のコンテキストの中でまったく異なった意味で用いられるということが分かる。西岡は次のように述べる。

与えられた素材を活用して、いかに独自の世界を再構成するかが、編集的創造性の基本です。

この「編集的創造性」を生み出すワークショップからヒントを得て、写真を用いて創作したストーリー（フォト・ストーリー）を語るという表現活動を工夫することができる。

この方法をさらに応用して、たとえば自己紹介のときに、「ショウ・アンド・テル」の要素を取り入れて、何かを示しつつ、それに即して自己を表現するという活動が展開できる。まずは提示するものを探すわけだが、これがなかなか難しい。学校にはとても持ち込めないようなものもある。そこでオリジナルの写真を生かす活動を工夫するとよい。学習者の多くはデジタルカメラやカメラの機能が付いた携帯電話を所持している。撮影したその場で内容を確認したり、相手の携帯に画像を送ったりすることもできる手軽さが人気の秘訣だが、自己紹介のために「自己を語る」というテーマで3枚の写真を用意して、その写真を示しながら自由に話をするという活動である。

学習者はまず、どのような写真を用意するかということ、ストーリーのプロットとともに検討する。プロットが決まったら、実際に写真を撮影する。何枚か撮影して、その中から3枚を選ぶ。3枚という枚数に関しては、西岡のワークショップに学んだものである。それらの写真を用いて、ストーリーを組み立てるわけだが、その際に簡単な脚本を作成させるとよい。グループで相互に写真を用いた自己紹介を実施し、特に好評を博したものを互選して、今度はクラス単位で自己紹介をする。単なるパターン化した自己紹介に比べると、様々な表現活動を組み込むことができ興味深い。

6 絵から生まれる物語

1999年版高等学校学習指導要領には、「古典の現代語訳など」を取り入れることが明記されていた。この「現代語訳など」の中には漫画をも含めて考えることができる。『源氏物語』の学習指導に大和和紀の『あさきゆめみし』が一役買っていることは事実である。また橋本治の『桃尻語訳枕草子』を初めとした作家による古典の現代語訳も現場での教材化が試みられている。現代語訳はもちろん、漫画や映像、さらにコンピュータゲームソフトなど各種メディアの力を借りて、古典と現代を架橋する試みがいろいろと実践されている。

写真と現代語訳を通して、『万葉集』の世界を現代に蘇らせようとする試みもある。「ドス・マスラオス」による『LOVE SONGS』の「Side. A」(光村推古書院、1996. 10)と「Side. B」(同、1997. 2)、および『SONGS OF LIFE』(同、1997. 10)のシリーズは、「愛」「人生」という普遍的なテーマをめぐる『万葉集』の現代語訳と写真のコラボレーションである⁷。『SONGS OF LIFE』の「あとがき」において著者は次のように述べている。

1200年以上を経ても変わることのない人間の「想い」に焦点を絞ることで、古典イコール面倒な文法の活用表や難解な古語辞典と思っているぼくらと同じ「古典食わず嫌い」の人たちにも共感してもらえる本を目指した。(中略) 訳詩を書きながら、写真を選びながら、ぼくらは1200年以上前の人々と時代を超えてコラボレーションをしているような気分を味わった。

このような趣旨の中に、まさしく古典と現代とを結ぶ一つの方法論を見ることができるだろう。これらの本に収録された訳詞は素朴で分かりやすい表現になっている。訳詩とともに『万葉集』の原詩もそのまま示されている。例えば巻一に収録された大海人皇子の歌の原詩と訳詩は、次のようになっている。

紫草のにはほへる妹をにくくあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも《原詩》

輝くように美しい／君がもしも憎いのなら／僕は恋したりしないだろう／すでに人妻である君に／僕は手を振ったりしないだろう《訳詩》

その他、様々な内容・形式の歌が取り上げられ、現代語の表現に置き換えられている。逐語訳というよりは意識だが、本には作者解説やことばの注釈なども添えられていて、古典の世界へのいざないという観点も十分に踏まえられたものと言える。

このように古典を現代語に訳すという活動を通して、古典の世界に親しむことができるだろう。さらに歌のモチーフと関連する写真を選ぶという作業にも、現代との接点がある。

授業では、原典の語意や全体の解釈を踏まえたうえで、学習者が自らのことばと表現を用いて自由に現代語に訳すという活動を取り入れる。さらにイラストや写真とのコラボレーションによって、原作のイメージを生かすような工夫も考えられる。

三省堂の『新明解国語辞典』と梅佳代の写真とのコラボレーションとして、『うめ版 新明解国語辞典×梅佳代』(三省堂、2007.7)が出ている。これはある語彙に関する『新明解国語辞典』の解説と、写真家梅佳代の写真とを見開きとともに集録したもので、その語彙に関する辞書の解説と写真とが巧みに交差して独自の味わいを醸し出した試みである。このような試みに学んで、ある写真に「タイトル」を付けて、そのことばの辞書的な意味を確認するという活動も可能である。

国語教育の多くが読解に関するもので、教師主導型の「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という一方向的な授業であるという現状の抱える問題点に関しては、本研究の中で繰り返し指摘してきた。古典の授業では、さらに「語意」「文法」という専門的な知識に関わる要素が介入することになる。古典に親しむための戦略を駆使して、まず古典に対する興味・関心を喚起することが先決であろう。現代との接点を探ることによって古典の面白さに気付かせ、少しずつ古典の世界にいざなうという粘り強い学習指導が求められている。

7 総括と課題

2002年度から小・中学校で一斉に実施され、高等学校では2003年度から学年進んで実施される学習指導要領では、完全学校五日制の実施に伴う授業時間の減少という問題が浮上した。「ゆとり」という趣旨のもとで進められた教育改革の弊害として、学力低下という問題が大きく取り上げられるようになった。大学生が小数や分数の基礎的な計算ができないという現実を初めとして、学力低下を立証する多くの事実が明らかにされ、物議をかもしている。学校教育で育成することが困難になった学力を、学習塾が保障するというわけである。現場では、必修となった「総合的な学習の時間」の扱いとともに、この学力低下という問題に向き合わなければならなくなった。それと同時に、各教科の教育で育成すべき学力とは何かという基本的な問題を検証する必要性が生じた。この機会に国語教育も、言語の教育としての側面を明らかにしながらも、国語科で育成する学力とは何かという問題を吟味しなければならない。

その一方で、現代社会の高度情報化はますます進展して、コンピュータを中心とする情報機器が急激に普及したため、学校教育とコンピュータとの関わりについても検討を急ぐ必要性が生じている。新しい学習指導要領において「情報科」という教科が新設されたことによって、高等学校の現場では教員免許の問題などの具体的な対応に追われている。そのような状況下において、学力論議とともにメディア・リテラシーに関する論議も活発に行われるようになった。

国語教育は文字通り「ことばの教育」であり、国語教育で本来育成すべき学力は、ことばを話したり聞いたりする能力、書く能力、および読む能力ということになる。それが今日では、ことばとともに音声や映像を通して伝えられる夥しい量の情報を受容したうえで、その内容を取捨選択して、本当に必要な情報を選択する能力、すなわち情報整理および情

報処理のための学力が必要になった。国語科の学力について吟味する歳には、今後メディア・リテラシーの問題を含めて検討する必要がある。

多様なメディアとことばとの関係に着目しつつ、学習者が興味・関心を抱いて表現活動に取り組むところに今回紹介した授業の意義がある。さらに、教師から学習者への一方向的なメッセージ伝達という一斉授業のスタイルを超えた学習者主導の方向性を確立するという点に意義が認められるはずである。

『デジタル・メディア社会』（岩波書店、2002. 4）において、水越伸が次のように述べている。

最大の課題は、日本の学校教育が今後どれだけ変わりうるかという点だ。情報教育、メディア・リテラシーの導入は結局、現在の知識偏重、画一志向、教師主導の日本型近代学校教育の枠組みを突き崩していく潜在力を持っているわけだが、それが本当に実現されるのだろうか。

この「日本型近代学校教育の枠組みを突き崩していく潜在力」を効果的に発揮で切る方向を模索することが、今後の課題でとなるのではあるまいか。国語科におけるメディア・リテラシーの授業の可能性に関する研究は、日本ではまだ初期の段階と見るべきであろう。本節では、冒頭に引用した鈴木みどりの定義におけるメディア・リテラシーの獲得を目標とした表現指導の実際に言及した。常に教育現場での実践を踏まえながら、地道な研究を展開したいと思う。

さらに続けて考える必要があるのは、中国の「語文」教育に導入されている「看図作文」の考え方である。絵図からことばを引き出して作文へと至らしめる「看図作文」の方法は、本節で提案した絵画・写真による作文指導と密接に関連する。この点に関しては鹿内信善の詳細な研究⁸を参照しつつ、さらに考察を深めることにしたい。

今回は絵画・写真を用いた表現指導を紹介したが、すべてに共通するのは、楽しく表現するという要素である。文章を書くことは本来楽しい営みであるはずだ。学習者が書くことが億劫でなくなり、書けるという自信を持たせることができればよい。何よりも書くことが好きになれば、授業は成功したものとして受け止めることができる。

《図3-4-2》

《図3-4-3》

注

- 1 鈴木みどり『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』（世界思想社、1997. 6）。
- 2 中村純子「映像を読み解く」（『日本語学』2002. 10）。
- 3 この実践に関しては、町田守弘「楽しく文章を書かせるための戦略ータロット占いを
用いて」（『月刊国語教育』2001. 1）で紹介した。
- 4 『編集の学校』（『別冊宝島・134』1991. 6）
- 5 アレクサンドリア木星王『秘密のタロット・カード』（西東社、1998. 6）
- 6 注5に同じ。
- 7 後に文庫版として改めて発行されている。三枝克之『恋ノウタ Songs to you せつな
くて』（角川書店、2001. 2）、『恋ノウタ Songs to you 愛しくて』（角川書店、
2001. 3）、『恋ノウタ Songs to you つのる想い』（角川書店、2003. 6）。
- 8 鹿内信善『やる気をひきだす看図作文の授業』（春風社、2003. 10）、同『「創造
的読み」の支援方法に関する研究』（風間書房、2007. 2）などに、看図作文に関
する研究が収録されている。